

## テレビドラマに見られる日本人の非言語コミュニケーション ・対話場面における話し手の首の動き<sup>1)</sup>に注目して・

李 賢珠

名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生

Lee.hyunjoo@b.mbox.nagoya-u.ac.jp

### 1. はじめに - 研究動機について

日本語を JFL (Japanese as a Foreign Language) として学ぶ上級日本語学習者が最も難しいと思う点は、実生活の状況に適した総合的コミュニケーション能力、或いはその応用力を身に付けることではないだろうか。総合的コミュニケーション能力とは、言語コミュニケーション (verbal communication - 以下、VC) 能力に加え、非言語コミュニケーション (nonverbal communication - 以下、NVC) 能力も含まれるものとする。近年の日本語教育では、コミュニケーションをより効果的に行うための技能として、NVC を会話授業の指導項目案の 1 つとして取り上げる (中井・大場・土井 2004) など、日本語会話教育において日本語学習者の NVC 能力の育成に関する試みが盛んである。海外の日本語教育の現場で生きた日本語を接する手段として多く用いられている媒体が映像教材であり、中でもテレビドラマは学習者の学習継続に強い動機付けになることや、日本人の日常生活に最も近い具体化されたイメージが提示されている (水原 1997、熊谷 2003) ことから、日本語教材としての価値はある程度認められていると思われる。このような映像教材が持つ特長を考慮し、今後の日本語会話教育において上級日本語学習者の実践的な会話運用能力の養成、特に NVC 能力の育成にテレビドラマが教室内外の教材として有用に活用される可能性を期待している。

### 2. 研究目的

本研究では韓国の上級日本語学習者 (JFL) を対象とした会話教育における映像教材の有用性を検証する。総合的コミュニケーション能力の中で主に NVC の習得に焦点を置き、実践的な会話運用能力の育成にテレビドラマを用いた教授法が如何に有効なのかを明らかにしたい。得られた研究結果を基に韓国の日本語会話教育におけるテレビドラマの活用可能性を示唆すると同時に、上級日本語学習者を対象とする NVC 能力の養成にテレビドラマを用いた新しい会話教授法の提案を試みる。

### 3. 研究課題

修士論文で扱った 3 種類の NVC (話し手の視線処理・首の動き・上半身の動き) の傾向について、分析するデータ数を増やしてより厳密に分析する。

韓国人上級日本語学習者 (JFL) を対象とするテレビドラマを用いた NVC の習得成果を分析する。

## 4. 先行研究

### 4.1 NVC の分類 : Ekman(1972)

本研究で分析対象となる NVC は身体動作学の類に属する(東山 1993)。Ekman(1972)では、コミュニケーションの中での身体動作学を機能・役割別に以下の5種類の下位分類している。表象(Emblem)/イラストレーター(Illustrator)/感情表出(Affective display)/レギュレーター(Regulator)/アダプター(Adaptor)

### 4.2 首の動き : 池田他(1996)、近藤(2005)

会話参加者の代表的な首の動きと言えば、うなずきが挙げられる。会話中のうなずきについて、池田他(1996)では聞き手のうなずきはあいづちの発話<sup>2)</sup>と共起しやすく、相手のポーズや特定の場所に現れやすいとしている。一方、話し手は聞き手のあいづちやうなずきに呼応する場所でうなずくことが多いとされている。近藤(2005)はうなずきのあいづちとしての機能以外に着目し、聞き手のうなずきは相手の発話を促す、又、話し手のうなずきは話に強弱を付けるアクセントとして、或いはターンを譲る際に用いられるとされている。これらの先行研究は異なる状況の会話データを分析対象にしているにも関わらず、会話参加者は発話の区切り毎にうなずく傾向があり、話し手は相手にターンを譲るためにうなずきを用いる等、共通する結果が見られた。

## 5. 研究概要

### 5.1 分析対象と表記方法

話し手の NVC の形状が聞き手より複雑であるという先行研究の結果から、話し手の NVC は使用する際にその機能が強く要求されると考えた。又、テレビドラマでは主に話し手の行動が画面に映し出されることが多く、より明確に観察・記述できると予想する。以上の点を踏まえ、本稿ではテレビドラマの会話場面における話し手の NVC の中から首の動きを分析対象とする。なお、会話参加者が話し手1名と聞き手1名である「対話場面」のみにその分析範囲を限定する。

データは話し手の NVC が発話開始から終了まで継続的に確認できる場면을収集して書き起こした VC・NVC データテキスト<sup>3)</sup>を作成、その内容を分析する。

### 5.2 分析結果

#### 5.2.1 ターン譲渡としての首の動き

この機能を持つ首の動きは、台詞の最後に現れる傾向がある。話し手が台詞の終了後にうなずく行為は自分の話が終了したのを意味し、相手に発話権を譲る際に用いられる。

【場面例】対面

杏子：なんかよう

E{h}

柊二：ん(#)そのさー かみなんとかしない

EEEEEEEEEEEEEEEE

EEEEEEEEEE

<BL>

この場面では、話し手の実質的発話「なんかよう」と首の縦の動きが共起していて、うなづくことが相手の返答を促す役割をしている。この類の首の動きは相手に働きかけをすることから、対話調節機能を持ち、Ekman (1972) の分類ではレギュレーターになると考えられる。

### 5.2.2 VC の強調としての首の動き

首の動きはそれを用いることによって、話し手の肯定は否定の意思を強調する機能がある。

【場面例】対面

柊二：いく

EE

杏子：(#)うん

E H h

<BL>

主にあいづち的発話と共起することが多く、首の動きの強弱が話し手の意思をより明確に相手に伝える役割をする。しかし、実質的発話と共起する場合は、首の動きの強弱が事柄の重要性に比例するとは限らない。VC の強調としての首の動きは VC を副次的に支える機能を持つと考えられるため、イラストレーターに分類出来る。

### 5.2.3 リズム取りとしての首の動き

次の場面で話し手は発話内に首の動きを加えることによって、自分の発話のリズムを取り、発話の進行を促しているように見える。

【場面例】

杏子：たいていこうゆうのよ たいへんでしょー がんばってね なんでもゆって やれ

EEEEEEEEEEEEEE{ H }EEEEEEEE{ h }EEE{ h }

ることはなんでもしてあげる

h h h

先行研究では聞き手のうなづきが話し手の話を促す要因であると指摘しているが、この【場面例】のように話し手は区切り毎にうなづくことによって、自発的に発話の進行を促していると考えられる。このような傾向は聞き手の反応が認識できない場面でも話し手の発話内で観察できたため、話し手のうなづきは聞き手のうなづきの同調効果以外の要因によって出現するものであると予測できる。つまり、話し手は発話内で複数うなづくことによって自らリズムを取り、自発的に発話を促しているのではないかと考える。このような機能から、リズム取りとしての首の動きは VC の強調と同じくイラストレーターに分類できる。

### 5.2.4 意思表示としての首の動き

VC と共起せず、首の動きが単独で現れる場合、話し手は首の動きのみで意思を表すことができる。

【場面例】対面

ゆら：りんちゃんはしらなかったんだよね

EEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE

りん：(#####)

H

<僕カノ>

この類の話し手の首の動きは首振りの強弱や頻度により話し手の意図の強弱が判断できると考  
える。意思表示しての首の動きは単独でもその意味が把握できるため、表象に分類できる。

### 5.3 結論

テレビドラマの対話場面に見られた話し手の首の動きは、ターンの譲渡、VC の強調、リズム取  
り、意思表示の機能を持つことが分かった。一見同じように見える首の動きでも、このように会  
話内でそれぞれ役割が異なるため、Ekman (1972) の下位分類に適用すると異なる NVC に分類さ  
れる結果となった。

### 6. 今後の課題

- ・データ分析及びアンケート調査の結果分析
- ・韓国語日本語学習者 (JFL) を対象とする NVC 習得成果の実験実施

### 注

- 1) 本稿での首の動きとは、首を縦・横に振る、傾けるなどの首による全ての行為である。
- 2) あいづち的発話とは実質的な内容を含まない言語形式であり、実質的発話とは実質的な内容を表現す  
る言語形式である。
- 3) VC・NVC データテキストの文字化の規則

「E」安定的な視線 「H/h」縦の首の動き(強/弱) 「#」ポーズ

### 参考文献

- ・ 池田裕・池田智子(1996)「日本人の対話構造」  
『月刊言語』 第25巻1号 大修館書店 pp.48-55
- ・ 近藤富英(2005)「非言語行動である「うなずき」の機能とその役割への一考察」  
『人文科学論集文化コミュニケーション学科編』 第39巻3号信州大学人文学部 pp.55-63
- ・ 東山安子(1991)「*Nonverbal communication*(非言語情報伝達)」  
『英語教育キーワード辞典』 日本英語教育学会 増進社 pp.460-465
- ・ (1994)「最近の非言語研究の研究動向と今後の展望 - 1990~93年の文献調査より - 」『異  
文化コミュニケーション』 第7号 神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所 pp.117-132
- ・ Knapp, M. L. 1972. *Nonverbal communication in human interaction*. Holt, Rinehart & Winston, Inc  
(牧野成一・牧の恭子共訳(1979)『人間関係における非言語情報伝達』東海大学出版会)